1-KO2-1 統合失調症の昏迷に対しての治療内容の検討ー昏迷群と非昏迷群の処方内容の違い

○成田 友加里、渡邊 理紗、石田 喬士朗、小黒 早紀、岩田 健
多摩総合医療センター精神科

【目的】当院に入院した統合失調症の患者について、昏迷を有した患者とそうでない患者の退院時の処方内容の違いについて比較検討を行った。【方法】令和元年1月31日から令和3年12月31日までに当院精神神経科に入院した患者のうち、退院サマリーの主病名が統合失調症あるいは統合失調感情障害である患者を網羅的に抽出し、180名を対象とした後ろ向き観察研究を行った。電子カルテから該当する患者の臨床所見（年齢、性別、主病名、副病名、入院期間、入院時及び退院時の昏迷の有無等）、治療（投与した向精神薬の種類と量（入院時、退院時、昏迷群の昏迷開始時と改善時））を調査し、昏迷群と非昏迷群の退院時の処方内容の違いについて比較検討した。また、本研究開始時に当院の倫理審査委員会での承認を得た。【結果】180名のうち、入院時（15名）あるいは入院中（8名）に昏迷を起こした患者は23名（昏迷群）で、退院時には全例で改善していた。昏迷を起こさなかった患者157名のうち退院時に軽快したのは112名（非昏迷群）であった。非昏迷群で処方の比率が高かったのがリスペリドン（非昏迷群、昏迷群:52%、38%）、クロルプロマジン（21%、13%）、クエチアピン（19%、13%）、ハロペリドール（19%、4%）、ブロナンセリン（12%、4%）であり、昏迷群で処方率が高かったのがアリピプラゾール（13%、17%）、アセナピン（6%、9%）であった。【考察】非昏迷群は昏迷群に比べてハロペリドールやブロナンセリンといったドーパミン遮断能が高い薬を使用される割合が高かった。それほどではないが、比較的ドーパミン遮断能が高いリスペリドン、遮断能が低いクエチアピンやクロルプロマジンの使用割合も高かった。昏迷群では弱いドーパミン作動性があるアリピプラゾールと中程度の遮断能があるアセナピンが使用される率が高かった。【結論】昏迷群では非昏迷群と比較して、ドーパミン遮断能が高いハロペリドールやブロナンセリン、リスペリドンの退院時の使用率が低かった。

1-KO2-2 愛媛大学

ンセリン

○松本 優[1,2]、河邊 寛
[1]医療法人十全会十全ユ
[2]愛媛大学大学院医学系

【はじめに】抗精神病薬と
皮吸収型製剤は、2019
統合失調症治療における
の利便性と効果の高さか
今回、実際の臨床現場で
【方法】対象は、2019年
学部附属病院において
た全症例とした。調査
薬剤選択の理由、初回
本剤以外の抗精神病薬
【結果】全47人（男性16
17人（36.2%）、その
±19.0歳であった。使
難6人（12.8%）、副作
（4.3%）であった。投
中央値で42.0日であ
中断が26人、その他
年齢は44.2±15.7歳、
15.7mgであった。統
17.9歳、初回投与量
た。せん妄、認知症
われており、病態に
型製剤は精神病症状
場合は、使用に十分
護に十分配慮して行
ある。

1-KO2-4 緊る

○石橋 拓実[1]、

7施設250名の看護師によるブロナンセ

吸収製剤の印象アンケート調査